

<論文><関係>への夢：『我が心は石にあら ず』論

藤村, 耕治 / フジムラ, コウジ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

63

(開始ページ / Start Page)

84

(終了ページ / End Page)

95

(発行年 / Year)

2001-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020151>

〈関係〉への夢

—『我が心は石にあらず』論

藤村 耕治

序 失敗した〈関係の物語〉

小説という文芸、とりわけ長篇小説というジャンルは、どんな形であれ人間と人間の関係を描くことなしには成立しないが、高橋和巳ほど人間関係について執拗に拘り、言及した作家は稀である。「友情小説」「あるべき人間関係」「義」に近い人間関係」など、その発言に繰り返し現れるのは、個に解体された人間の救済を志向し、ありうべき関係性を希求するという一つの単純な理念に他ならない。しかし、エッセイ等で論理的に、あるいは情緒的に語られる作家の関係認識と、小説に描かれる具体的な人物間の関係のありようとの間には、ある超えがたい溝のようなものがあって、読み手は首を傾げざるを得ない。

確かに人物たちは果てしない議論によつて互いに異議を提起し合い、時には部分的に理解し合い一時的には連帯もする。しかし殆どの場合最終的には理解や連帯の絆は断ち切られ、孤立

した個人として自閉的に破滅する。作家の関係論の根底には、他者というものが本質的には了解不能な〈外なるもの〉でありながら、社会的存在であるほかない人間の生活にとつて不可欠な随伴者でもあるという事態や、今なお複雑さの度合いを増しつつある近代以降の社会構造の変容に伴う、倫理的な価値の下落や関係性の困難などへの認識がある。そこに人間たちは安易に手などつなぐべきではなく、あえて孤絶を噛みしめる必要があるといった孤立への志向も生まれ、真の理解や連帯は容易になしうるものではないという絶対命題も提示されるのだといえる。

しかし、ことは単に理念としての関係性への希求と、それが絶望的に困難な現実との相克、あるいは理念の逆説的な提示という次元の問題にとどまるものだろうか、という疑問が私にはある。一つには、作家が希求した形而上的なありうべき関係性の内実に関わる問題があり、他方には形而下的な具体的生活者としての人間同士の関係のありように関わる問題がある。端的

に言ってしまうれば、作家は関係を「語った」が「描いて」はいないのでないか？　そこに先に言った「溝」を感じさせる要因がある。とりわけ、作家が友情と並ぶ人生の宝と認識していた「愛」の問題を、作品を通して考えてみようとする時、困惑を感じないではいられない。

『我が心は石にあらざ』は、作家の言葉によればこの「愛」をテーマにした作品だということになる。単行本の帯に書かれた作家の言葉を聞いてみる。

私たちの心の支えは、つねに愛と理想なのだが、それは多く不幸な状況の中で芽生え燃焼し、しかもともすれば崩れるのはなぜだろうか。／密室の愛情ではなく、ともに社会的職務を担った男女の愛情とその破綻をとおして、私は現代に生きるものの精神のあり方を考えてみようとした。

そうだろうか？　作家の意図と、実現された作品との齟齬を言おうとしているのではない。この作品には理念と作品世界の乖離というだけではすまされない、あえていえば大きな錯誤とも呼ぶべきものが孕まれていて、作家の言葉どおりに「愛情とその破綻」の物語と読むことを躊躇わせる。

『我が心は石にあらざ』に関する否定的評価は、既にある程度出尽くしている。それらの先行批評に、若干の私見を補って総括すれば、ほぼ次のようなものになる。

第一に、語り手信藤誠の人物造形に関する批判が挙げられる。まずは彼の対女性認識、つまり愛人久米洋子、妻藤乃、妹下世といった、彼を取り巻く女性たちに対する類型的で陳腐な描き方を、高橋文学の愛の構造という枠の中で最も早い段階で指摘

した『対話』八号（高橋和巳追悼号）の橘正典の立論を土台とした女性論。それに関わる信藤の非人間性やエゴイズム、女性に対する無自覚な蔑視や甘えに対する糾弾。次にインテリを自負しそれを公言する臆面のない身振りへの反発や、大衆から遊離し本質的には労働者の苦しみに対しては無知であるという形で提示される知識人論。そして信藤の「科学的無政府主義」という理念の安易さや非現実性、またそれが組合の実質的活動にどう反映されているかが不明であることなどを衝いた思想論。さらに信藤が内的矛盾を自己存在の根源的な部分で剔抉できていないために存在の虚偽性が透けて見え、分裂した像しか結びえておらず、また過去の体験と現在の思考や破滅のありようとの関連が不明であるといった存在自体のあやふやさをつく人物論。おおよそこの四点に集約しうる。

第二に、小説の結構上の問題を挙げれば、久米洋子の年齢の不確定性、初出時に見られる登場人物名の不統一などといった小説としての基本的な不備への批判、愛の局面に至ると不意に分析的・解釈的になって、読者の感興を削ぐ語り口の問題、そして最も力を込めて描写すべき終局のストライキの顛末を、記録風な客観描写を装って端折ってしまうという本質的な構造の欠陥に対する懐疑などとまとめられる。

今これらの批判に、屋上屋を重ねるつもりはない。部分的に反批判を加えたい立論もなくはないけれども、あまり生産的とも思えない。『我が心は石にあらざ』は失敗作だと断言するのは容易である。けれども、これらの批判を踏まえ、一通り首肯した上で、なお先に提示したような関係論に関わる問題点や評価

軸もまた、新たに提示しうるのではないかと思われる。それによつて、作品内部の問題のみならず、作家の文学全体に関わる特質、その限界と可能性についても考えることができるはずである。

一 プロットの変容

『我が心は石にあらざ』には、先行作品として同題の短編ラジオドラマの台本（以下ドラマ版とする）が残されている。これを収録する高橋和巳全集第六巻解題によると、「昭和三十九年十二月一日、保坂安雄演出にてNHKラジオより放送された」ものである。雑誌『自由』に小説『我が心は石にあらざ』（四二年一〇月に新潮社より刊行された単行本ならびに若干の補訂を加えた全集版を含め、以下小説版とする）の連載が開始されたのは昭和三十九年一二月号からである（終了は四一年五月号）。ドラマ版は小説版の原型として構想されたと想定してよいであろう。

ドラマ版は単発ものである故に展開が急で、唐突に見える部分もなくはないが、構成はしっかりしており、テーマも明瞭である。精密機械工業会社の優秀な技術者で労働組合の委員長でもある信藤は、大幅な人員整理を含めた合理化を発表した会社側に対し、組合として反対の意向を提出する。女子部委員の久米や工員部の浅沼らが主張する急進的なストライキ闘争案に反対できなかったためだ。彼は自身を「元来が世事にうとい技術屋にすぎない」と自覚し、合理化闘争という大問題に際して切

り盛りする自信もなく、辞任を考えている。旧友でもある社長の息子からは、彼の妹千世との結婚を申し込まれており、さらに現社長の引退後は重役として助けて欲しいと懇請されてもいる。しかし彼の妹と副社長の結婚は出世のための政略結婚だという中傷が組合内部から向けられ、信藤は憤激し傷つきながらも、妹を守るため旅行に出す。信藤と社長・副社長との直談判は決裂し、組合はストライキか執行部交替かを迫られる。そんな時、久米は突然信藤に愛を告白し、信藤も彼女に対する思慕を口にするが、愛は拒もうとする。そこへ旅先で千世が自殺したという報が入る。信藤の内的瓦解を表す衝撃音と慟哭の後、久米のナレーションで、突然の信藤の指令で組合は充分な準備も策もないままストライキに突入、無惨に内部崩壊して敗北した後、信藤は一人退職したことが告げられる。その後彼女はすっかり落魄した信藤と時たま逢瀬を重ねるが、抱き合いながら「何故かはしれないけれども、私たちの愛もまた終わったのだということ」をはっきりと自覚する。

最後に久米の語りで、一篇のテーマが提示されて、ドラマは終わる。

（自分がいつか母となったら、息子に——註）人の世の苦しみとはどういうものか、男の子が社会に出て受けねばならぬ試練とはどういうものか、そして数々の試練のあるにも拘らず、なお人の誠を守る生き方というものがあり、それがどんなものであるかを、繰返し繰返し語りきかせたいと思う。……

以上がドラマ版のプロットである。直線的で単純ではあるが、

信藤の苦悩や破滅への意志はそれなりに妥当なものとして描かれており、千世の役割も必然的で明確である。(信藤の妻は分裂症を病んで入院中ということになっていて登場しない。)久米との関係においても信藤は筋を通しているし、久米も自律的な意志を最後まで貫いている。何よりも「愛の終わり」を主体として自覚するのは彼女自身である。ただ、信藤の破滅と久米の告白との連関は希薄で、二人の関係は愛と呼べるかどうか分からないほど曖昧なものでしかない。

ところで、小説版のエピグラフに使われた『詩経』の詩句は、ドラマ版では初めと終わりにモノローグで語られる。原典は「国風(邶風)」中の一編で「柏舟」(柏で作った小舟)という五章からなる詩であり、結婚に破れた貴婦人が不遇を悲嘆しながらも、固い節操を貫こうとする歌と解される。女性の詠であるため、久米の心象を表すと一応取れるが、節操を守り初志を貫く決心を語る章の詩句が使われていることを考えれば、同時に信藤の久米への気持ちや、不退転の決意で志を貫く心情を託したものと解することもできる。

信藤の「志」とはいうまでもなく、戦争で生き残ったものの負い目から生まれた義務感や倫理観を貫くこと、わずかの運命の相違で恵まれない境遇にいる下積みの人々を守らねばならず、自己の栄達のために他を犠牲にすることはあつてはならないという思いに他ならない。ドラマ版では信藤は理科の予備学生として通信部隊にいたために特攻兵となることを免れたことになっているが、後述するように譴責感の源泉として小説版よりむしろ説得力があるといえる。信藤は最後まで「人の誠を守る」

〈転ばぬ石〉としてヒーローであり続けるし、久米もまた彼の思いを理解し、胸に秘めつつけるヒロインでありうる。

もとより傑作と呼ぶには当たらない平凡で通俗的なドラマである。しかし、先行作品として小説版と比べてみると、不可解な点や無理な部分が格段に少ない。こちらの方が明らかに物語としての骨格の確かさを持ち得ていると言わねばならないのである。長篇化に当たって加えられた様々な細部の設定によって、信藤の矛盾や社会的役割が拡大・複雑化して作品の奥行きが深まっているのは疑えない。けれども、企業側の合理化強行策にたいする闘争と組合の内部崩壊による敗北という基本プロットは変わっていない。

プロット上の最も大きな相違点は、妹千世の自殺であり、これがドラマ版の信藤の破滅を導く重要な契機となる。ドラマツルギーとしては無論安易であり、唐突の感も免れないが、橘正典の前掲論文が指摘するように、高橋文学における妹という存在が、性による〈穢れ〉をもたぬが故に聖なるものとして表象されるのだとすれば、その喪失が信藤の破滅的情念の求心力となつて不思議はない。小説版は、この「妹の死」を完全に消去し、久米洋子との「愛とその挫折」のみを代置する。あるいは、妹の死を主人公の滅びの情念の根底に置くとする発想は、当時書き下ろし作品として改稿と執筆を続けていた『憂鬱なる党派』(四〇年三月脱稿)に転用することを決めたための変更であつたのかもしれない。いずれにせよ小説版では、ドラマ版では充分に描き得なかつた〈愛〉の問題が大きくクローズ・アップされているようにみえる。

ドラマ版と小説版の冒頭部分の微妙な差異を見ても、作家が小説版を当初から〈愛〉の物語として構想していたらしいことは明らかであろう。しかし、ここにこそ小説版の最も大きな欠陥が胚胎するのである。それは単なるプロットの変容という以上に、本質的に作品を変容せしめてしまう欠陥として作用することになる。

二 思想的身振りという虚偽

ドラマ版では、のちにいくつかの批判を生む元となった人物の年齢が確定されており、これによると信藤誠は三六歳、久米洋子は二七歳ということになっている。小説版の第一章で信藤が大学新卒の久米に初めて会った時が九年前だという記述があるのは、この年齢差を無意識に転用したものである。しかし、諸家の言う通り、大学卒業から九年を隔てれば彼女は少なくとも現在三一歳になるはずで、第六章で二九歳とされていることと矛盾する。久米が新奨学生に選ばれたのを九年前とするつもりで（とすれば現在まさに二七歳となる）誤って書いた可能性もある。また彼女が一四期の奨学生であり、第一期の信藤が戦争のために卒業を二年遅らせたことを考慮すれば、二人の年齢差は一二となり、信藤は現在四一から四三歳に設定されていることになる。小説版の信藤はその経験や役職から考えても三六歳とは思えないので、こちらは妥当な年齢といえる。

年齢に拘ること自体はさして本質的ではないが、高橋作品によく見受けられるこういった年代や数字に関してのいい加減さ

は、小説としての基本的な欠陥であるという以上に、作家の文学のありようの本質に根ざしていると考えられる。高橋文学の人物たちの殆どは、おそらく作家の頭の中に浮かんでいる、茫洋として実体化されない観念的な像としてあるのであって、それがしばしば人物の類型化を生み、人形のように作者の運命観の枠内で自在に操られている印象を与える。しかしあえて逆に言えば、作家にとつてこの内在的・観念的な像のみが唯一のリアリティなのであって、そこに外在的・現実的な装いを与えようとすると、時に齟齬が生じてしまうのだといえる。

ことは、作家のリアリズム観に由来する。妄想や観念のリアリティを信じようとしながら、作家にはなおそこにある現実こそリアルであるという抜きがたい実証主義がある。埴谷雄高との方法的相違を「還行」という仏教用語に託して、妄想の現実的還元こそ自己の方法論だと語った作家は、現実性（現実的であること）とリアリティをやや安易に結びつけてしまっているようなのである。作家の現実把握の仕方や人物の描き方が、しばしば自然主義的な傾きを持つと指摘されることや、現実の事件や出来事に素材を求めることと、それは無関係ではない。しかし、繰り返しせば、作家にとつて真にリアルであるのはある理念・想念を持った実体ならざるものの存在性自体なのであって、乱暴な言い方をすれば、現実的に事件が何年前であろうが、人物が何歳であろうが、作家の中のリアリティは毫も犯されないのである。

たとえば小説版においては、「精神的に危機を抱えている四〇過ぎの中年男が聡明で美しい二〇代後半の女性に世間から認め

られない恋慕を抱く」という心理的狀況に、またそこに「知識人のみが背負わねばならない『精神の暗黒』を見出す」という観念を与えることにこそ、作家固有のリアリティが存在するのだと言わざるを得ない。もとより問題は、そういう作家の内的リアリティと、読者が感得するリアリティとの隔絶ないし齟齬にある。

今日の読者が素直にこの作品を読んで何より奇異に思うことは、作家が信藤誠を正木典膳のようなアンチ・ヒーローとしてではなく、社会的構造変革の只中で、時代と自己の内なる怨念との距離を縮めることができず、大真面目に苦悩する知識人^{II}ヒーローと想定し、それを信じているかに見えることである。知識人という言葉がある一定の幻想的なリアリティを持ちえた時代の作品だということ差し引いても、その大仰な思想的身振り^レは滑稽に映らざるを得ない。そして、ことは知識人としての像のみならず、信藤の存在論的ありようそのものにも関わっている。

信藤は、かつて特攻兵として^レ死の操縦^レを習い、一度は生を諦めて死に赴くことを自分に納得させた^レ魔の情熱^レを内に秘めたまま生き残ってしまったことに、自己の存在形式の核を置いており、死んでいった不運な者たちに拭いがたい負い目や譴責感を持つている。その埋め合わせをするかのように、戦後身につけた反体制的^レ観念^レを組合活動において実践しようとする。しかし同時に呪わしい出身階層への嫌悪から出世主義的な上昇志向をも捨てられない。彼はこれを矛盾として自覚し、やや露悪的に告白する。また一方、謹厳実直な研究者であり、

人望の厚い労働組合の委員長であり、実情はそうではないながらも自身は円満な家庭人であると自負している。それが久米洋子との交渉によって揺らぎ、内なるエゴイズムに直面して自らに対する信頼感を失うことが彼の人的崩壊の原因であるとされる。信藤はこれをも同様に矛盾というが、先ほどの矛盾と、この矛盾は、明らかに質を異にする。

たとえば彼は「他人が信藤誠は誠実で剛直な人物だと思ひ、私自身もそうだと思ひ込んでいた私ではなく、真に何者であるか、どのようにしか生きられないかを久米洋子が私に教えたのだ」ともっともらしく語り、今までは抽象的にしか意識していなかった矛盾や欠陥が彼女との関係によってはつきり露呈されたのだという。正木典膳が語るのと同様の心理的ロジックだが、信藤がそれによって気づかされたのは家庭のエゴイズムであり、ありていにいえば妻帯者でありながら若い女性の^レ肉の誘惑^レに抗し切れなかった自分の醜さであり、それ以外のことは決してない。

彼は自分の中の^レ観念^レと^レ出世主義^レの矛盾にも、泰平ムードの中で^レ平和^レに挫けそうになっていて、時に^レ魔の情熱^レに拭いがたい牽引力を感じてしまうことにも、世の中や組織の安定とともに協議会の活動にも以前ほどの情熱をもてなくなつたことにも、久米洋子とは全く無関係に気づいている。そして、そういう自覚的な様々なことが「内部においてだけではなく、外に向けても、隠しようもなく破綻しかけた」時に久米洋子と親しくなったのだという言葉で、彼の破滅はいわばすでに用意されたものであることを明かしている。したがって、彼が最後

に「戦いに敗れたのではなく、この平和に勝てなかったのかも
しれぬ」と総括的に述懐するに至るのももつともなことであつ
て、久米洋子との〈愛〉(というより単なる性交渉)は彼の内的
破綻の、単なる一面あるいはきつかけに過ぎないのである。言
い換えれば、信藤の破滅物語を作品構造上の本流と見れば、〈愛〉
の問題は傍系的な支流に過ぎないと言いうるはずである。にも
かかわらず、語り手はそれを矛盾という言葉で一括りに結び付
け、「愛情とその破綻」が自分を崩壊させたと言いたげなのであ
る。この作品を不可解にしている最も大きな問題は、この錯覚
ないしは虚偽に他ならない。

ところで、〈観念〉と〈出世主義〉の矛盾であれ、家庭のエゴ
イズムであれ、そういうものを内包する人間性自体を云々する
必要はない。典型的とはいえないまでも、誰の心の内にも多少
はありうる矛盾に過ぎないからだ。作家は、幅広い人間像こそ
描けなかつたが、このような理念と現実の相克、理性と生理的
肉欲とのせめぎあいを内に抱え込む矛盾態としての人間認識に
おいては、かなり深い洞察家だったといえる。先に内的リアリ
ティという言葉を使ったが、こういう人間像の表現において作
家が与えるリアリティは群を抜いている。通常何とか糊塗して
凌いだできたこの種の矛盾を、極限化して働きあわせ、同時に人
物たちが存在の根源に持っている滅びの情念とでもいうべき負
のエネルギーを噴出させて彼らを破滅に導くというのが作家の
真骨頂なのである。したがって問題は、信藤にあつては理念や
思想に関わる矛盾と肉体や情欲に関わる矛盾が、道徳的・倫理
的な相同性によって無批判に混同され、しかもそれらがともに

安易な形で〈魔の情熱〉なる情念とも無媒介に結びついてしま
う処にある。

たとえば、後に信藤と久米洋子の逢い引きの定宿になる田舎
町の料理屋で初めて二人が肉体交渉を持つ場面では、信藤は「あ
たかも、かつての〈死の決断〉の際に不意におとずれた諦めの
意識に逆らおうとはしなかつたように」、「あらがつてみてもど
うにもならぬ。ただ目を閉ざし、巨大な流れに身をゆだねるよ
り方法はないのだ、と」考える。特攻兵として彼が甘受しなけ
ればならなかつた死への〈諦念〉がいまだに彼を縛り、苛む心
理的事情は納得できる。けれども、その「諦め」と不倫の情事
との間には、語り手がいかに抗弁しようとも、何の関係もない。
もし何かがあるとすれば、久米洋子の若さや肉体に喚起された
〈青春〉の映像、すなわち美しい恋愛や若々しい性欲の充足を期
待しうる季節を、生きる意志とともに「諦め」ねばならなかつ
たことへの悔いと、それを久米洋子の肉体によって満たそうと
する自分を正当化するために、一切を超越的に突き抜けたかの
ように信じ込んで平静を得ようとする心理メカニズムの表面的
な同一性に過ぎまい。

また、第七章で久米に妊娠を告げられ、もう逃げ道はないと
悟った時不意に〈魔の情熱〉を蘇らせ、唐突に破滅の意志を抱
くのも不可思議である。

自分の腐った臓腑をつかみだして投げつけるように、一
切の矛盾を極限化し、人に目をそむけさせながら、人の志
とはいかなるものか、精神とは何かを明るみに出して破滅
してみせよう。すべての思想は極限にまでおしすすめれば

必ず、その思想を實踐する人間に破滅をもたらす。(略)一個の人間の阿修羅の憤激が、どれだけのことを為しうるか、組織ボケしている人間たちに示さねばならぬ。平和に馴れ、無一物でありながら、あたかも巨万の富を抱きえているかのように錯覚し、何かを守らねばならないかのように錯覚している人間たちの精神を根こそぎ震憾せしめよう

悲壯で切羽詰った覚悟のように見えるが、この時の信藤にここまで激昂させる外的内的などんな危機があったであろうか。外的には宮崎精機のオートメ化に伴う人員整理の話が出ていたとはいえ、闘争や全面対立には至っていない。地方選に協議会の自主候補を立てるといふ方針に伴う煩瑣な業務はあり、研究が思うように進まない苛立ちもなくはないだろうが、危機というほどの事でもない。内的には、既に恒常化されていたであろう〈平和〉への違和感を別にすれば、久米洋子とこのことを中傷した怪文書への不快と久米自身の変貌への戸惑い、その程度である。

言つてしまえば、自分にとって〈美〉そのものであった妹まで組上に載せた中傷文に傷つき、性的交渉を境として愛人が女の独占欲を剥き出しにし始め、さらに妊娠の不安と仕事の行き詰まりから自分に凭れかかるようになった、そればかりのことである。先の場面における信藤の危機は、彼の破滅が久米洋子とは本質的には何の関係もなかったのと同様に、理念や組織に関わる彼の矛盾とは何ら関係がないものと言わねばならない。つまり、信藤のこの突然の憤激は、久米洋子に妊娠の事実を告げられ追い詰められた彼が、己の置かれた立場の苦しきや醜悪

さを糊塗するために、〈魔の情熱〉という切り札をかざしながら理念上の問題にすりかえてしまふ体の欺瞞的な〈思想的身振り〉としか見えないのである。さらに厳しく言えば〈魔の情熱〉を、それを持ち出しさえすればすべてが正当化される免罪符のように使っていると見える。

あえて揚げ足を取って作品を貶めるつもりはない。作家の人物たちの内面的リアリティを最後の一线で支えている情念の内実が、この語り手には極めて希薄であると言いたいのである。そして一方で信藤の〈観念〉つまりは彼の生命線であるはずの理念に対する思想的な追い詰め方も不十分で、現実の矛盾を超克するために理念を貫いて破滅するという作家の人物に固有な精神の純一性といったものが強く感じられないということをお願いするのである。

もしも作家が信藤を、〈特攻隊の生き残り〉などという情念の悲壯さに安易に凭れかからせず、その破滅を〈理念への殉死〉などというもつともらしい形で粉飾せず、彼の若い愛人に対する身勝手さや家庭のエゴイズムを極限まで貫いて、〈思想〉的にはなく〈人間〉的に破滅を意志する語り手として造形しうれば、そこに知識人というものの無惨で醜悪な人間像が定着されただけなのである。けれども信藤はあくまで、ヒーローとして振舞わねばならない。作家が彼に与えた観念的な像が、それを要求するのである。その結果、信藤誠は〈愛〉におけるエゴイズムも〈情念〉における奥深さも〈理念〉における徹底した追尋もすべて中途半端な、ただ身振りだけが大仰な、いい気な知識人とししか見えない人物になってしまつていと言わねばなら

ないのである。

三 夢想の共同体

この作品の〈愛〉の問題に関する信藤への批判の中心は、そのエゴイズムにあり、彼にあるのは独り善がりな深刻そうな内面的葛藤だけで、〈愛〉の関係性における本来的な、誠実で真摯な苦悩がないということに尽きる。もとより反駁の余地はない批判である。

たとえば信藤は、久米洋子と決定的な男女の関係を結んだ後、しきりに「家庭を壊す気はなかった」と強調すると同時に、繰り返し久米洋子の肉体そのものへの執着を臆面もなく語る。あまりに多くの精神的利益とあまりに少ない肉体の喜びとか、自己嫌悪を甘受してよいと思えるほど快楽をむさぼった覚えはない、とかいったもの言いは、彼の「底の浅い欲望」の内容をよく表している。そこには相手を精神の〈共苦者〉と認めるなどという高邁な発想の入る余地はない。精神の結びつきの純粹さが肉体の介入によって失われ、相手に対する感情が急速に冷却し別離が訪れる、この間の事情を指して平然と「愛情とその破綻」と呼ぶならば、確かに信藤（あるいは作者）は〈愛〉の何たるかを知らず、浅薄な人間認識しか持ち得ない空虚な人物という他ない。

けれども、信藤が求めたものは本当にいわゆる〈愛〉と呼びうるものなのか？ という拭いがたい疑問が私にはある。これまで愛という言葉を括弧つきで表記してきたのはそのためであ

る。これを〈愛〉と呼ぶことに信藤の、あるいは作家自身のある錯誤があるのではないだろうか？ もとより、作家の中に抜きがたく潜んでいる性愛^{II}罪・稼^{III}れという観念図式、あるいは愛の不可能性というキー・ワード^{注3}でそれを解くことも不可能ではない。しかし、信藤（あるいは作者）が真に希求しているのは、たとえば正木典膳が求めたような（性）愛とは全く異質なものであったと思えるのである。

すでに見たように信藤と久米洋子との関係は、いかにそう見えるように書かれているとしても、物語の構造上本質的な関与をしていないと言える。つまり信藤の〈愛〉の虚偽性が問題なのではなく、作家の内的リアリティが、どれほど苦心してもいわゆる男女の〈愛〉をテーマにすることを拒んでしまっていると言えるのではないか？

信藤が、そして作家が真に求めたものとは、異性愛を超越した何かであり、「ありうべき関係性」そのものである。信藤におけるこの「ありうべき関係性」への希求は、共同体構想として現れる。彼が苦勞して作り上げた地域連絡協議会とは、「科学者の研究連帯にみられるような」「イデアル・タイプスとしての自然科学における研究連帯のような連合形態を、まずは組合に、さらには政治組織一般に及ぼせばよく、また、及ぼすことは可能であるという確信」に裏打ちされた「科学的無政府主義」を思想的根幹として、宮崎精機を含む、この地方都市の有力企業三社の労働組合を始め、中小企業の労組、商店街や漁業・農業組合などと連合し、地方行政、地方自治の確たる足場にするという構想の上に成り立っている。

こうした地域自由連合主義の利点について信藤は、権力分散と自主独立性が守られること、いわゆる組合エゴイズムの抑止力となること、平和革命を現実に推進しうる唯一の形態であることの三点を挙げ、これは「誓約共同体」であると共に「認識共同体」であり、その認識において平和革命を遂行する同志であると捉えている。「科学的無政府主義」の思想的妥当性とはもかくとして、構想自体は理念として極めてまっとうなものであるといえる。この連絡協議会が他ならぬ宮崎精機の合理化反対ストライキ闘争の渦中で、分裂派の切り崩しにあい空中分解するわけだが、理念や信念の美しさが政治の醜い現実は無惨に敗北するというのも作家好みのモチベーションであつて、今問題にする必要はない。

注意したいのは、この組織体に対する信藤の「情念」の質とでもいべきものについてである。協議会がまだ小規模だった頃、未組織の労働者を組織化するために奔走する彼を突き動かしていたのは、大学時代に身につけた左翼的「観念」である以上、生き残りの譴責感から来る、「より不運なもの」への使命感であつたとされる。しかし、中小企業の労働者たちは「観念」よりも「親方」たる企業主に対する忠誠心が強く、組織化することは困難を極めたという。そのとき彼はあることに気づく。

最も不運なものが、もっとも不運なるゆえに、またもっとも強い忠誠心に呪縛されている。(略) そうなのだ、今にして思えば、私が苛立ち、戦おうとしていたものは、単純な資本の構造といったものではなかつたのだという気がする。

(第三章)

信藤が戦おうとしていたのは、かつて自分たちに「死の忠誠」を誓わせた、日本国家が強いた運命なのだと言つてもよいが、そこにはもう一つ別の側面がある。それは、不運な境遇ゆえに資本家や経営者が資金提供する奨学金にすがつて勉強させてもらうしかなかった自分を縛り、忠誠心を強要する何かへの呪咀である。その内実はたとえば、小説の冒頭部分で端的にこう表現される。

世は近代社会であるとはいへ、地方都市においてはなお、人の評価は、個人の能力や公的な位階よりも、共同体の承認がより強くものを言う。そして毎年春に、古風な煉瓦建ての商工会議所のホールで催される奨学生を祝福する儀式は、この土地の実質上の指導者たちが、自らの陣営にあらたに人材を補給する、その認証式でもあつた。

つまり、奨学金出資者としての商工会議所やその一員であることを強要し続ける銅の会に象徴される、この「地方都市」のありようこそが、信藤を呪縛する「見えない敵」と言えるのではないか。言い換えれば、不運の源泉である「家」という血縁的な共同体を含む「故郷」という地縁的な共同体が、彼を束縛している。すでに繰り返し言及してきた「仄暗い打算」としての「出世主義」と、「熱っぽい大義名分」としての「観念」の間で彼自身が自覚する矛盾とは、会社という「利益共同体」と連絡協議会という「誓約・認識共同体」との間にある矛盾といえるが、その源泉は実は一つのものであつて、それがこの地方都市という「共同体」のあり方に他ならない。不運の源泉としての故郷から逃れるための手段によつて故郷に縛られているとい

う矛盾こそ彼の根本的な矛盾なのであり、信藤において真に呪うべき相手は、こういう地方都市の日本的で前近代的なありようそのものであった。

だとすれば、地域連絡協議会とは、利益共同体としての企業に対してのみならず、血縁と地縁によって堅固に結び付けられている極めて日本的な共同体に対する、誓約と認識によって固く連帯した近代的で普遍的な共同体を志向したものとということができる。さらに言えば、彼はここに「共苦しうる共同体」への夢も託していた。喜びや愉しみのみならず、人間が存在において不可避免的に甘受せねばならない愉しみをも共にする共同体。これこそが、作家が希求した形而上的なありうべき関係性の内実に他なるまい。

先にこの組織に対する信藤の思いを「情念」と表現したのは、それが故郷あるいは「日本的なるもの」への呪詛を根底に置く、彼の存在のもう一つの核であるからに他ならない。だから、たとえば地方選において彼らが戦わなければならなかったのは他の既成政党であるよりも「日本の社会構造の重層性」そのものであり、「血縁共同体、地域共同体の網の目はがっしりと保守系の有力者に握られており、漁村部は昔の網元が依然として力を持つていた」ような現状だったのである。

信藤は、自由連合という形式を持つ組織にもっとも理想的な関係性の夢想を託した。しかしそれは実現されない。夢想を実現するための具体的な方策は殆どないに等しいし、協議会の実体をイメージさせる描写すらない。そもそも、穏健さゆえに肥大していった組織に、そのような力がありえようか？ 信藤の

「科学的無政府主義」を理解し、共感する会員が何人いるのか？ ありようは、信藤が久米洋子に寄せた身勝手な思いと同様、まさに誇大妄想的な夢想と呼ぶ他はないものだったとしか読めない。そうではあっても、夢想のリアリティそのものは残る。日本的、前近代的な「地方共同体」への反逆という夢想。

おそらく彼の敗北は、「誓約・認識共同体」において誓約の倫理性と認識の統一性を守りきれずに「利益共同体」の経済至上性に敗れ去ったと言うより以上に、正しい理念と純粹に精神的な美しい連帯を志向した「普遍的なるもの」が、保守的で膠着した「日本的なるもの」に負けたという側面をも持つと考えられる。このように考えると、信藤が久米洋子に求めていたものが実は「愛」などというありきたりな関係性ではなかったということもはつきりしてくる。彼女もまた、不運ゆえに故郷に縛りつけられる苦しみを持つ存在であったことを思い起こせば、いかに独り善がりな夢想であったにせよ、彼が久米洋子に「共苦者」を求めようとしたのは、この共同体構想と地下茎でつながる、ある普遍的な関係性への希求のゆえに他なるまい。

いや、少なくとも、私は何かこの地上の男女関係とは全然別なものを求めていたのだった。言葉に出せば、それはあまりに感傷的になるか、宗教的になりすぎる。だが、現に地上にあり、普通に営まれる生活や関係以外にも、何か特別な思考、別な関係がありうると夢想することは、罪だろうか。

(第一〇章)

それはもとより罪ではない。しかし彼は現実として、もっとも愚劣な「地上の男女関係」しか結び得なかった。ここに、信

藤の理念ないしは夢想と現実の、もつとも本質的な矛盾が露呈する。くどいほど繰り返し「家庭を壊す気はなかった」と述べる彼は、滑稽なほど家庭という血縁共同体に呪縛されている。しかし、彼が守り通したいと考える家族とは、精神を病みかけている妻とさして愛情を注いでいるとも思われぬ二人の子供のことだろうか。おそらくそうではない。彼が家庭に望む、明日への活力となる「安らぎ」を与えてくれるのは千世以外にない。言い換えれば信藤を、普遍共同体を夢想する進歩的な近代主義者にしたのが貧しい石灰岩採掘夫の父であるなら、血縁共同体に縛られる保守的な家庭人にするのは、「秘められた聖なる母のイメージ」としての千世に他ならない。

そしてさらには、久米洋子に求めた「地上の男女関係とは別なもの」という観念は、千世に託された「聖なる母のイメージ」と響き合ってもいよう。肉体的快楽をとにもすることは決してなく、無条件で精神の「共苦者」となってくれる人など、男にとって「聖なる母」以外にはありえない。信藤が久米洋子のことを、千世にだけ告白するのも、彼女が信藤にとって「母」であり、秘密を打ち明けることで同じ苦しみを共にしてほしいという無意識の願望があったからだと思えないだろうか。

ともあれ、信藤に仮託された関係論の根底に、ありうべき共同体への望みがあったことは疑えないと思える。冒頭の述懐に「一つの家庭、一つの共同体をすら、経済的にも精神的にも私たちは作ることができなかつた」とあるのは、二重の意味合いを持つている。即ち、経済的单位としての家庭を持つことはできなかつたという意味と、精神的に男女の関係性を超越した「普

遍的な共同体」を作ることができなかつたという意味と。いや、それ以上に、信藤が妻や子供達と「一つの共同体」としての家庭を作りえていたかどうかすら疑問であるし、連絡協議会もまた「普遍的な共同体」と言えるほどの内実は持ちえていなかった。彼が、家庭にあつて「家父長」であり、組織にあつて「指導者」であろうとし続ける限り、それはやはり「日本の共同体」の構造をなぞった雛形の域を出ることはない。ただ、この作品で理念としての「共苦共同体」が、地上の関係性を超えうる「関係」への夢として構想されたことの意味は、決して軽視すべきではない。

意識的にか無意識的にか、昭和四〇年前後の高橋和巳には、膠着した共同体意識を含む「日本のなるもの」への憤激と挑戦の情念が蟠っていたと思われる。殆ど同時期に書かれた『邪宗門』（四〇年一月～四一年五月）が、「日本のなるもの」の再検討と、地上的な男女の関係を超越する教義を含む、ありうべき共同体としてのひのものと救霊会の創造に向かつたのを見るとき、『我が心は石にあらず』という作品の成立が、それと決して無関係なものではなく、深層において繋がりを有したものであつたように思えてならないのである。

注1 中田秀「藁の書簡」（高知聰他著「高橋和巳をどうとらえるか」一九七二年・芳賀書店刊所収）、脇坂充著「孤立の憂愁を甘受す」高橋和巳論（一九九九年・社会評論社刊）など。

注2 拙稿「憂鬱なる青春の記念碑——『憂鬱なる党派』論」（『日本文学誌要』第五三号）参照。

注3 橋正典前掲論文、拙稿「『悲の器』論」（『日本文学誌要』第五七号）参照。